2010年（平成22年）2月12日（金）
毎日新聞

ひと

「自殺対策に取り組む僧侶の会」代表
藤澤（ふじさわ）克己（かつみ）さん（48）

自殺を考え苦しむ人の手紙相談にのっている。会に所属する僧侶28人が筆をとる「自死の問い・お坊さんとの往復書簡」。今月、1580通に達した。「やっと気持ちの届け先が見つかりました」の言葉で始まる手紙には、便せん10枚に手書きの小さな字がびっしりと並んでいた。やり取りが数十回に及ぶこともあり、「おかげで踏みとどまることができそうです」との便りをもらったことも。

神奈川県出身。手紙相談の返事を考え、気づくと夜が明けていることも。趣味はガーデニング。

「自殺だと成仏できないって本当ですか」。遺族に何度か尋ねられた。仏教の経典を調べたが、そんな記述はなかった。07年から会で毎年12月に開く「自死者追悼法要」では、「仏様は分け隔てなく救ってくださいます」と語る。安堵（あんど）し、涙を流す遺族もいる。「僧侶として伝えるべきメッセージがある」と感じる。

安楽寺（東京都港区）の住職。早大卒業後、IT（情報技術）企業にエンジニアで就職。06年に実家の寺を継ぐと、「生き死にを問い続けるのが僧侶の道」と、自殺対策の現場に飛び込んだ。自殺防止活動をするNPOで研修を受け、電話相談員にもなった。07年、意気投合した仲間と「自殺対策に取り組む僧侶の会」を作った。

命の問題に直面した時の相談役になってほしい。僧侶に向けられるそんな期待をひしひしと感じる。「全国どこに住む人でも近くの寺に相談できるよう、同じ志を持つ僧侶のネットワークを1000人に広げたい」

文・山寺香　写真・小林努